

## 少数派の特性の尊重

朝倉高等学校2年

西田 菜七子

色にはそれぞれ名前がついていて、自分の目に見えた色を他の人に伝えることを可能にしている。でも、自分だけ色の見え方が他の人たちと違っていている人もいる。そのような人たちは色弱や色覚多様性と呼ばれており、生まれつき色の見え方が他の人たちと異なる視覚特性である。人の色覚のタイプはP型・D型・C型と大きく分けて3つある。“C型”が一般的に言う色の違いが分かる人にあたり、P型・D型は色覚特性をも

つ人にあたる。

私の祖父もその特性をもっている。

祖父は仕事上で、色の区別がつかないことがあり、ミスを避けるため同僚に聞いた。すると、色の区別がつけられないことを理解してもらえず、少し見下されたような態度をされることがあった。多くの人が「分かる」ことが「分からない」ということはバカにされる一因になるということを知り、その後はそのつらい経験から同僚だけでなく家族にもこのことを隠していた。分からないことを侮辱されるということへのトラウマである。

日本人は少数派の意見をいやがるという風潮があるように思う。

例えば、目が悪い人の割合は少なくないため、ためらわず言うことができるのに対して、祖父のような少数派の特性をもつ人の場合には、他人からの評価を気にして言えないことがある。

このような多数派の意見にとらわれて少

数の意見を持つ人が言えないという世の中を変えていかなければならない。すぐに変えることは難しいかもしれない。しかし誰でも、人はできること、できないことがあるということ、人は皆違っていることが当たり前であり、多様性があることを知ってほしい。

色の区別がしにくいという特性をもつ人は日本人男性の5%、日本人女性の0.2%いるという。男女同数の40人学級ならばクラスに1人いるという計算になる。また、特性が現れていないが、その遺伝子を持つ“保因者”と呼ばれる女性が10%いる。

色覚特性の人の割合は多数派ではないが、意外と多い。色覚特性を持つ人たちが普段の生活で色分けによって困ることがないように学校や社会の理解と、少しの気配りが必要だ。

今の時代はそのような社会になるように少しずつ変化してきている。

例えば、テレビのリモコンや日本地図など

である。いつも何気なく使っているリモコンだが、よく見てみると色のボタンの上には文字で色の名前がかかっている。また日本地図では、県と県を区別するために色を変えるだけでなく境界線は黒でふちどりされている。これは“カラーユニバーサルデザイン”と言って様々な要因で色が違って見える人たちにも、色によってもたらされる情報がきちんと伝わるように工夫されているそうだ。このような工夫がもたらされてきたのも今まで祖父と同じ特性をもつ人が声を上げてきたからだと思う。人は誰でも少数派の特性をもっていることを知れば他人に対して接し方が変わり、皆が生きやすい世の中に変わっていくことができるだろう。

“自分と他人の違い”を受け入れる人が増えることで、祖父のように悩む人が減り、それを自分の個性として大切にしている人が増えていけると思う。また、ためらわず自分の苦手な部分について他人にサポートを求

めることができる人が多くなっていきけるはずだ。

価値観の違い・人種国籍の違い・体格の違いなどいろいろな多様性をもっているように、どれも「当たり前」ではなく、「私の色覚のタイプはC型・P型・D型なんですよ。」と笑って話せる時代がくることを願っている。

まずは、自分が他人に寄り添い、気遣いある行動をとっていききたい。

また、私のこの作文を通して、少数派の意見を持つ人が意見を言いやすい環境づくりの第一歩となってほしい。

## 親と子

朝倉高等学校2年

竹田 賢介

「続いて、次のニュースです。」

いつものようにテレビを見ているとこの言葉の後に驚くようなニュースが告げられた。それは、親が自分の子どもを虐待し死なせたというものである。具体的には、子どもを世話することに嫌気が差しその子どもにもものを投げつけたり床にたたきつけたりしていたそう。このニュースを聞いて私はどうしてそのようなことができるのだろうか疑問を抱

くのと同時にそういった事例が存在していることに対して憤りを覚えた。自分が生んだ子どもであるにもかかわらずその大切な人を虐待しさらには死なせるというのは、親としての自覚や責任を全く持っていないように感じられ、亡くなった子どもが気の毒に思われる。

私は毎日ニュースを見るようにしているのだが最近には特に児童虐待についてよく耳にする。家庭内で自分の子どもにも暴力をふるうといった行動を頻繁に聞くがそれだけではなく幼稚園などでも保育士が園児に対して危害を加えるといった事例も聞く。そこで児童虐待の実態について調べたところ、二〇二三年には件数が過去最多の約二十一万件となっていたそう。児童虐待の摘発件数は年々増加し続けており、また虐待死も少なからず報告されているのが現状である。さらに私は虐待の原因についても調べてみた。虐待の増加する背景として

は社会の虐待問題への認識が高まっていることや、通報意識が高くなっていることによる。そしてそもそも虐待が起こる理由として、子どもが病気や障害を持っていたり、親が育児に対して不安を持っていたり、経済的に余裕がなかったりなど多種多様に存在しているのだと分かった。

私は、親の個人的で一時的な感情で子どもに対して虐待をしているのだと考えていた。例えば、仕事があまくいかないとしたことや、人間関係で揉め事が生じたといったことにより機嫌が悪くなるというようなことである。しかし、そうではなくて親のみではどうにもならない問題、子どもの障害や病気、貧困などといったものにより児童虐待が発生するのだと学んだ。ここから、私のように児童虐待に対して間違った考え方を持つ人を減らすのと共に親が育児をしやすい環境を作っていくことが必要であると考える。

この児童虐待問題はこれからも増え続け

ていくと私は思う。確かに虐待に対する認識や通報意識は高まっているかもしれない。しかし、虐待する人自身とその周囲の環境が変わらなければこの現状も変わらないと考える。私には現在起きている虐待を防ぐ力がなく、社会を大きく動かす力も持っていない。そんな私にできることは、正しい知識を身に付けることだ。調べるまでは様々な問題が複雑に絡み合っていて児童虐待につながっているとは知らず、親に全て責任があると決めつけていた。だから正しい知識を得て少しでも虐待の原因や現状について理解を深めていこうと思う。そして実際に自分が育児をすることも考えながら問題と向き合っていきたい。

## 『命を数えることは』

朝倉高等学校2年

小倉 千歳

あなたは八月六日の広島、八月九日の長崎への原子爆弾投下は正しかったと思いますか。おそらく、日本にいる多くの人は正しくなかったと思うでしょう。実際に二〇一五年の段階で実施された「広島と長崎に原爆を投下したことは正当化できるか。」というアンケート（2015Pew Research Center survey.Q15）では日本にいる人々の七十九パーセントが「正当化できない」と回答しており、「正当化で

きる」と回答した人は十四パーセントにとどまっています。一方で、アメリカでは原爆投下を「正当化できない」と回答した人は三十四パーセントで、「正当化できる」と回答した人は五十六パーセントであるとわかっています。

原爆により、広島と長崎を合わせて二十万人以上の莫大な死者をだし、生き残った人々もケガや放射能の後遺症で苦しんでいる人々がいまだにいます。それにもかかわらず、なぜ日本とアメリカでこのように大きな差が生まれるのでしょうか。

その一つの要因として、「日本への原爆投下は終戦をもたらしした。」という認識の人が一定数いることがあげられます。戦争を最終させたことで、その結果、戦争が続いていれば犠牲になっていたであろう多くの人々の命が救われていた、だから原爆投下は正しかったという考え方です。原爆で犠牲になる人の数よりも、今後戦争が続いて犠牲に

なる人の数の方が多くなると、具体的な数を出して、原爆を肯定した人も戦時中になりました。もし、そのことが事実であるとするならば私はその意見に反対します。いくら終戦により多くの人が救われるからといって、広島や長崎の人々をないがしろにして良い理由などどこにあるのでしょうか。広島や長崎で犠牲になった人も私たちと同じ人間です。戦時中の生活が苦しい中でも、必死で前を向いて生きていたのです。きっと誰もが明日があると信じていたはずです。そんな人々を原爆は一瞬にして消し去りました。人の命は決して、数えてはいけないと私は思います。

戦争をやめさせる手段は原爆しかなかったのでしょうか。現に戦時中、原爆を否定し誰も殺さない手段を主張したアメリカ人もいたのです。原爆を使う必要性はないはずでした。原爆投下は、軍事的な目的だけでなく、アメリカが戦後の主導権のため原

爆の威力をソビエトに見せつけることで軍事的優位を示そうとしたと考えられています。まるで日本を実験のように扱い、多くの犠牲者を出したことはとても大きな罪ではないかと私は思います。

しかし、アメリカだけが責められることではないとも私は感じます。日本も国内外の多くの人々を傷つけました。とても残ぎやくに。今でもつらい思いをしている人は、きっと大勢います。そもそも、戦争などなければ、人が殺されることも、人が人を殺すこともありませんでした。戦争は全てを狂わせます。その罪の大きさを今の私たちがしっかりと「受けとめる」必要があります。そして、今おこっている現実に目をそむけず、同じあやまちをくり返さぬように、本当のことを知り、物事に立ち向かっていかなければなりません。

## ハンセン病への理解

朝倉高等学校2年

中村 咲良

「ハンセン病」とは、「らい菌」に感染することで起こる病です。感染し発病すると、手足などの末梢神経が麻痺し、汗が出なくなったり、痛い、熱い、冷たいといった感覚がなくなることがあり、皮ふに様々な病的な変化が起こったりします。また、治療法がない時代は、体の一部が変形するなどの後遺症が残ることがありました。

明治四十年に「癩予防ニ関スル件」と呼ばれる法律が制定されました。この法律で

は、療養の方法がなく屋外で生活している患者「浮浪らい」の受け皿として療養所が設置されました。昭和六年には「癩予防法」が制定されました。これにより、療養所への全てのハンセン病患者の強制収容が進み、全国各地ではハンセン病患者ゼロを目的とした「無らい県運動」が活発に行われるようになりました。昭和二十八年に「癩予防法」は「らい予防法」に改正されました。当時、治療薬が普及しているが患者の強制隔離は続き、退所規定が設けられませんでした。これは、一度療養所に入所すると一生出てくることができないことを意味します。このようにしてハンセン病患者の隔離政策が行われました。

この隔離政策の中で患者やその家族は様々な偏見や差別を受けていました。その差別や偏見の原因として、病気の進行に伴って、顔や手足が不自由になったり、変形したりすることで、治療薬が開発される



までは「治らない病気」であると考えられ、また同じ家族内で発病することがあり、遺伝病だと考えられていたことです。また、患者を強制的に隔離させたことです。このような間違った理解や行動からハンセン病は「強い感染力を持った恐ろしい病気」だと人々は信じていたのです。

ハンセン病患者は療養所に入所してからも家族に迷惑をかけないために、実名を捨てて偽名を名乗る人もいました。療養所内では断種政策が行われていたために、結婚しても子どもを産むことが許されなかったり、家族や故郷とのつながりが途切れて、病気が治っても家族と一緒に暮らすことができなかつたり故郷の墓に埋葬してもらえなかつたりという生活を長い間強いられてきました。

「無らい県運動」が行われるなかで、ハンセン病患者の住居を大掛かりに消毒したことで、患者の家族への偏見、差別が強まり

ました。また、近所付き合いから疎外され、結婚や就職を拒まれたり、住み慣れた故郷や土地から引っ越しをしなければならなかつたりするなどの差別も受けていました。

平成八年に「らい予防法」が廃止され、隔離政策は終わりとされましたが、入所者の多くは高齢でハンセン病の後遺症による身体の不自由で退所後の生活が厳しく、また、社会に出てても根強く残った偏見などに悩まされたり、社会経験がほとんどなかつたりすることによる不安で再入所される方も多くいます。

私は、ハンセン病とその背景や歴史の中で人々がどのように生きてきたのかを知っている中で、「知らない」ということが一番恐ろしく、そのせいで自分も他人も気づかない間に傷つけてしまうのだと思いました。まだ当時の医学が追いついていなかったことや、私自身もハンセン病について調べたから正しい知識や事実を知ることができ、そのおかげ

で人々が患者やその家族に対して行った行動が偏見や差別であると分かり、間違っていると言えます。ですが、その時生きていた人々は知らない病気になり、患者は強制隔離され、治療薬もない。とても大きな恐怖を抱えながら、全員が自身を守り生きようとしてとった行動が差別、偏見へとつながったと考えました。私自身も、まだまだ知らないことがたくさんあります。これから生きていく中で毎日新しい出会いがあると思いますが、私が自分で知ろうとしなければ知ることができないものもあると思います。だから私は、そういったことを自分で正しく理解して、正しい知識を得て、差別や偏見を受けてきた人々、今を生きる人々と向き合っ  
て生きていきたい。